

Title	「大塚」史学における「二つの道」
Sub Title	
Author	豊田, 四郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1947
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.7/9 (1947. 9) ,p.510(144)- 547(181)
JaLC DOI	10.14991/001.19470901-0144
Abstract	
Notes	慶應義塾九十周年記念論文集：第一輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470901-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「大塚」史學における「二つの道」

豊田 四郎

一、工業における資本主義の發達において、封建的生産様式から資本制生産様式への轉化の徑路、換言すれば小營業の段階からマニユファクチュアへの段階への資本制生産（産業資本）の展開が革命的で急速であるか、改良的で緩慢であるかということは、それとともに形成されつゝある直接生産者⇨賃労働者階級にとつてきわめて重要な意味をもつてゐる。

なぜならば、封建的生産様式およびこれに照應する封建的イデオロギイの清算が根本的で徹底的であればあるほどそれは労働者階級の社會主義のための斗争にとつて、益々都合な物質的精神的諸條件を與へるからである。これに反して、逆に封建的生産様式の殘存が資本制生産の發達を阻止しかつ緩慢ならしめ、プロレタリア化しつゝある直接生産者經濟的文化的政治的諸條件をなかく野蠻な封建的な分散的な域に近づきとめておくことができればあるほどそれは資本家階級にとつて益々有利であるからだ。

それゆゑ、マルクスにより「資本論」第三卷第四篇第二十章（註）で提起された封建的生産様式から資本制生産様式

への轉化に關する二つの徑路の問題は、一つの國民經濟・産業部門における労働者階級の社會主義のための斗争に對する、具體的歴史的條件はどうか？ という觀點からみて、きわめて重要な方法的意義をもつ。

（註）要點を引用すれば

「封建的生産様式よりの推轉は二重の徑路からなされる。」第一「生産者は、農業上の現物經濟と中世的都會的産業のツンプト的に統合された手工業者とに對立して商人となり資本家になる。これ眞に革命的な徑路である。」

第二、或はまた商人が直接に生産を掌握する。この種の徑路は（例へば十七世紀のイギリス織物商が獨立材業者を自己の支配下においてから羊毛を販賣しかれらから毛織物を購買するという事實にみる如く）歴史的にはいかに推轉として作用するとはいへ、それ自身においては舊來の生産様式を革命するものでなく、むしろこれを保存し、自己の前提として維持する。かくして、例へば十九世紀の中葉に及んでも尚、フランスの絹工業、イギリスのメリヤス工業及レース工業における製造業者は多くは單に名目上の製造業者たるにすぎず、現實の上では單に商人にすぎなかつた。かれは機械業者たちをして舊來の分散的な仕方で行つてきたこれらの機械業者たちの上に、商人として支配を行つてきたにすぎぬ。この行き方はどこでも、現實的資本制生産方法の妨げとなり、現實的資本制生産様式の妨げとなり、現實的資本制生産様式の發展と共にそれは廢滅に歸する。それ

は生産様式を革命することなくして、直接生産者の地位を悪化するにすぎず、かれらおぼ資本のもとに直接に従屬せしめられている人々よりもヨリ不良な諸條件の下に立つ單なる賃銀労働者およびプロレタリアートに轉化し、舊來の生産様式を基礎としてかれらの剰余労働を占有する。」

「商人が産業經營者になる。というよりは寧ろ手工業的殊に農村的小産業と彼自身のために經營せしめる。他方にはまた生産者が商人になる。例へば機械親方が商人から羊毛を少量づつ供給され自己の職人たちと共にこれを商人のために加工することをやめて、自ら羊毛なり糸なりを購買して、製造した織物を商人に販賣するという如きである。生産上の諸要素は彼自身の購買した商品として生産行程に入る。而して彼は今や、個々の商人なり又は一定の顧客たちのために生産するのではなく、商業世界のために生産するのである。生産者が彼自身商人になる商人資本はたゞ流通行程だけを行うものとなる。本來、商業はツンプト的並に農村家庭的な産業及封建的農業をば資本制的經營に轉化せしめる前提條件であつた。それは一部分的には生産物のために市場を造り出すことにより、一部分にはまた新たな商品等價を造り出し、新たな原料及び助成材料と生産に供給することによつて生産物を商品に發展せしめる。かくして市場

及び世界市場を目的とするところの生産といふ點からみても、最初から商業を基礎とせる生産諸部門が開始されることになつた世界市場から来る生産諸條件を以てするといふ點からみても、

る。」「資本論」第三卷上二九三—三五頁

二、この問題は同時に、産業資本の形成過程における商業資本の歴史的役割の問題に關連してゐる。商業資本・高利貸資本は理論的にも歴史的にも資本制生産Ⅱ産業資本の不可缺の前提條件であるが、充分な條件ではない。

なぜならば、商業・高利貸資本は舊來の生産様式をほりくずしはする、しかし、それがどの程度に舊來の生産様式を解體せしめるかは後者の堅固さと内部的組織のいかんにかゝつてゐるし、その解體の結果としてどんな新しい生産様式が出現するかは商業にかゝつてゐるのでなく、舊來の生産様式そのもの、歴史的性質にかゝつてゐるからだ。たとえば、古代世界においては商業の發達は奴隸制生産をもたらしたし、近代世界においてはそれは資本制生産をもたらした。

しかし、このように、商業資本は資本制生産の形式を促進する歴史的前提條件であることを忘れてはならない。すなわち、商業資本は、貨幣財産を集積し、大規模な市場を組織し、交換價值のための生産という性格を生産諸體制にあたえることによつて、産業資本の前提條件をつくり出す。それゆゑ、商業資本も産業資本も、ともに價値を増殖する資本として同型の經濟現象であり、同じ經濟法則に服するのである。つまり、商業資本の「利潤」は單なる「掠奪」や「偽儲」でなくやはり價値法則を前提として説明されねばならない。それにもかゝはらず、商業資本が産業資本の形成を「阻止」し、「反動的」であるかのやうにみえるのは、商業資本と産業資本との發達は反比例し、従つて、孤立的分散的な小商品生産の段階（小規模な生産とこれに照應する小規模な市場）においては小商品生産Ⅱ産業資本に対する商業資本の純經濟的な意味での壓倒的獨占的な支配がふるわれ、そして依然として手工業生産の技術の上にとつ

ているマニファクチュアの段階においては産業資本は小經營を驅逐することができず、商業資本と密接不離に結合しているからである。このような産業資本の未發達の段階を、賃労働と資本という對立からでなく「商業資本對産業」という對立の觀點からみれば、商業資本が産業資本の形成を阻止するかのやうに見えるのは當然である。

二つの道の問題は、小商品生産者の孤立的分散的な生産手段の所有が、少數の資本家の所有に轉化され、労働が資本の下に従屬せしめられることによつて、労働の社會化と生産手段の集積とがおしよめられ、したがつて社會主義のための諸條件がつくられつゝある過程における、商業資本の「進歩」的な役割をこそ問題としてゐる。マニファクチュアの段階の特徴は、大經營と小經營との並存、両者が商業資本によつて結びつけられており、産業資本と商業資本とが密接にかつ不可分に結合してゐることであるが、この資本制生産のマニファクチュアへの發展を一つの國民經濟・産業部門について歴史的に考察してみると、小商品生産者が産業資本家となる一道と、商人が事實上の産業資本家となる一道とが絡みあつており、その緩急の差はあれ、ともに少數の資本家の下での労働の社會化と生産手段の集積とをもたらす、大工業のための準備的段階を作り出す。

三、二つの道の問題は、これを國民經濟的統一、大工業のための國內市場の展開という觀點から、より具體的に展開すれば、一國における資本主義の繼起的な發展諸段階の推移のテンポの性質に關する問題であり、同時に一國における資本主義の基本的な社會的生產諸形態の歴史的な特質に關する問題である。これを全體としての國民經濟的統一という觀點から見れば、一國における資本主義の段階の構造の歴史的特質、とくにマニファクチュア時代ないし廣汎にマニファクチュアの殘存せしめられてゐる産業部門において産業資本と商業資本との具體的な結合に關する問題である。それゆゑ、マニファクチュアⅡ産業資本と「問屋制家内工業」Ⅱ商業資本とをきりなして「對立」せしめて

はならない。

さらに、資本家的生産様式の社会的な生産形態に關する問題を、個別資本の經營形態の問題に矮小化してはならない。たゞ、個別資本が社會總資本の一構成部分であり、後者が前者のからみあいから構成されているかぎりにおいて、個別資本の經營形態が資本制生産の生産形態の一見本としてあらわれるかぎりにおいて、經營形態は社会的意味をもつのだ。マニユファクチュアは、先行的な段階である小商品生産の直接的な結果である。だから、二つの道の問題は、直接生産である孤立的な分散的な小商品生産者がマニユファクチュア資本家となるか、商業資本家がかれらをマニユファクチュアの構成部分として從屬せしめてゆくとかの問題にほかならぬ。

國內市場論の觀點からこの問題を一段と展開したレーニンによれば、第一の道は、小商品生産者が資本家的單純協業者となり、つぎにそれが分業を採用して資本家的マニユファクチュアとなる。(註二)レーニンは、このマニユファクチュアを、「典型的資本家的マニユファクチュア」または「狹義のマニユファクチュア」とよんでゐる。(註三)

第二の道は、小商品生産者に對する商業資本家の支配の最高發展段階である「資本制家内労働」を支配するところの、したがつて事實上の産業資本とに轉化した商業資本が、小商品生産者たちを部分労働者にするによつて、あるいは、商品別分業をおこなはしめることによつて、全體として手工業生産と分業とを技術的基礎とし、資本家的協業を組織する場合である。この場合、レーニンはかゝる全體としての生産機構を、「家内制大生産」(註三)あるいは「その組織から見れば資本家的マニユファクチュアに近い。」(註四)とよんで小作業場から分出してそれらを支配する大作業場は存在しないとしても、そのかわりに深く根をはつた分業と部分労働者大衆の資本家の完全な從屬「部分労働者大衆が、資本を完全に從屬あしめられた複雑な生産機構」(註四)などとよんだ。これらの二つの道・形態は、たがいに

らみあいながら、マニユファクチュア段階における商業資本と産業資本との結合をあざやかに表示しているのである。

なお、右の第二の場合、このやうな商業資本の小商品生産者に對する事實上の賃労働者としての支配関係を、産業資本の繼起的な發展段階からきりはなして漠然と「問屋制家内工業」とよび、これを小營業やマニユファクチュアと異るところの産業資本の特殊な發展段階・生産形態と見ることは誤りである。産業資本の發達という前向きの見地からまさに資本主義の矛盾の形成と展開が問題となつているとき、分散的な部分労働者(小營業的農民・親方・職人)に對する商業資本のかゝる支配は、これを全體としてみれば「商人を頂點とする家内制大生産の組織である。ただ、この場合、産業資本は未だ封建制の胎内から形成されたばかりの原始的な状態にあり、従つて野蠻な中世紀的諸關係によつてからまれ(チープ・レーバーと労働者の土地經濟への結合)それだけに搾取の真相がいんべいされているにすぎない。そしてこのやうな段階においては、産業資本は商業資本に從屬せしめられてか、精々併存しつゝからみあつてゐるものだ。」

(註)

一、レーニン「ロシアにおける資本主義の發達」岩波文庫版、

下巻三六一四〇頁、七二頁

二、同七五―六頁

三、レーニン「人民の友とは何ぞや」白揚社版、三七四、三七

四、マニユファクチュアは手工業的生產を技術的基礎とするがゆえに、小經營を完全に驅逐することが出來ず、小經營及び家内労働者と大經營との並存、その結び目としての商業資本の廣汎な存在こそがマニユファクチュア時代の特質

をなしてゐる。それゆゑ、商業資本は、マニユファクチュアの段階に特殊な資本と賃労働との搾取關係・階級關係をイ

五、三八〇、三九六、五五二、五六四、五六六頁

エンゲルス「住宅問題」序文、スターリン「レーニン主義

の諸問題」ナウカ社版、六二―四頁などを参照

四、レーニン「發達」下、九三頁

ンペイしてしまふ。だから、商業資本と産業資本との發達における反比例の法則(註一)を正しく把むことは、この搾取關係、階級關係の社會經濟的内容を捉えるために重要なのだ。

小商品生産者はこの場合、もはや決して獨立の生産者ではなく、これらの「工場主」「産業資本家や」「製造家」「商業資本家の事實上の賃労働者すなはち「家内労働者」となつており、資本家的マニファクチュアの不可欠の「派出所」となつてゐるか、問屋を頂點とする「問屋制家内工業」の一構成部分となつてゐるかである。

なお、この場合、産業資本の社會的發達段階がマニファクチュアの段階に止まつてゐるのであるから、資本家的マニファクチュア生産は、製造家・問屋・流通を自己に從屬せしめてしまふことは出来ない。それゆゑ、この産業資本と「資本制家内労働」との間にくつかの商業資本が介在する場合には、これらの商人が材料の分配をする専門的商人として、そのかぎり生産が流通を從屬せしめつゝある過程にあるとしても、マニファクチュア時代の全體としては、商業資本は産業資本といわば「肩をならべて」支配してゐるのだ。だから、マニファクチュアの「派出所」としての「資本制家内労働」を媒介する商業「資本」と、自ら「問屋制家内工業」「分散的マニファクチュア」の頂點となり「資本制家内労働」から搾取した剰余價値を全部そのポケットに入れる商業資本とは、一應、區別されねばならぬ。

だからといつて、「マニファクチュア」資本家なるものは、必ず「大作業場」「狹義のマニファクチュア」をもつていなければならぬとはかぎらない。製造家・問屋が、技術的に手工生産にもとづいて部分労働もしくは製品別分業を組織し、經濟的に全體として資本家的協業をおこなつてゐるならば、これはマニファクチュアである。かゝるマニファクチュアが、商人のイニシアチヴで機械を採用することによつて、そのまゝ、大工業に推移し、商人が大工業資本

家となることになつて、商業資本家的支配が産業資本的支配に完全に道をゆすりうることは、すでにマルクスの指摘したところである(例、ロンドンの家具製造業)(註二)。われわれはかつてこのようなマニファクチュア時代における、商業資本を頂點とする家内労働者群に對する分業にもとづく協業を、典型的マニファクチュアと對立せしめて、分散的なマニファクチュアと呼んだのである。

このように、問屋や大作業場主のために、事實上の部分労働をいとなみ、從屬せしめられてゐる小經營(親方・職人・下請人・農民)は、ナロードニキにとつて獨立の生産者のように見え、かれらは、このような小經營の没落は、ツァーリズム權力下の協同組合によつて救済しうると考へ、ツァールの國家にその救済を期待した。(註三)ナロードニキは、かゝる全體としての關係において形成され發展せしめられつゝある資本主義的矛盾、労働の社會化と生産手段の集積とを見ることが出来なかつた。小生産者が商品經濟體制の下に生活し經濟を営んでゐるとき、かれらは小ブルジョアであるが、この小ブルジョアのイデオログであるナロードニキは、市場に對する小生産の關係は小生産者を必然的且つ不可避的にブルジョアジとプロレタリアートとに分裂せしめることを表象しえないのだ。これに反して、レーニンは、このような小經營は問屋や大作業場を頂點とする家内制大生産の一構成部分であると考え、これを全體として資本家的性質をもつ生産機構としてとらえ、そこに大資本家と分業的に組織された事實上の労働者との敵對的矛盾を見た。かゝる生産機構は、おくれた技術と労働者の微細な土地經濟えの結合を特徴とし、資本家的支配のほかに高利貸性や半隷農的小作制度や野蠻な労働條件の無数の網の目によつてつきまとはれており、したがつて、資本家的搾取をいんべいするためにもつとも好都合な制度である。そして、労働者階級の經濟的文化的水準を低下せしめ、政治的組織、結集を孤立分散せしめる點においても資本家にとつてもつとも好都合な制度である。しかしながら

かかる生産機構はあくまで資本家的性質をもち、したがって資本主義の矛盾を形成すると共に、その歴史的使命をもつ。すなはち、それは労働者階級を教育し、訓練し、組織することによつて、資本主義の墓掘人をつくり出す。

(註)

一、「資本論」第三卷、上、邦譯二八六―七頁

二、同、二九四頁
三、「人民の友」四四七頁

五、マニユファクチュアの段階において廣汎に利用され、資本家的搾取關係、階級關係の存在をいんべいするところの「資本制家内労働」にふれておこう。「資本制家内労働」すなはち、資本家によつて前貸された材料を出來高拂によつて賃加工するといふ搾取形態は、資本主義のすべての發展段階に見うけられるが、とくにそれはマニユファクチュアにとつて特徴的である。その特徴は、第一、資本家と家内労働者のあいだに極めて多くの仲介人が存在し、かれらが大企業家から卸で買つて小賣で分配すること、第二、現物による支拂がおこなはれていること、第三、非衛生的労働と不可避にむすびついていること、第四、労働日が極めて長いこと、第五、婦人、少年、兒童等のチープ・レーバーが用ひられること、第六、直接生産者が土地との關係を保つていられるため賃賃が極めて低いこと、第七、家内労働者が分散していること、第八、家内労働者の分散と仲介業者の過多とは、高利貸制度とあらゆる形の人身的隷屬とをともなうこと、等である。

つぎに家内労働普及の諸條件は、第一、農民の土地への緊縛、第二、農民層の分解、すなはち、一、自己の労働力を賣らなければならない。しかも安く賣らなければならない大衆的な農村プロレタリアートの存在、二、労働を分配するにあつて問屋の代理人の役割を演ずるに充分なほど地方的市場圏によく通じている富農の存在（なお、經營主や買占業者や問屋が同時に富農であることが多い）第三、資本主義によつて造出される相對的過剰人口の存在。一言にしていへば、廣汎な「チープ・レーバー」の存在である。(註二)

なお、マルクスはマニユファクチュアの生産物の本質が、二程連続的であるか組立式であるかによつて、マニユファクチュアを有機的マニユファクチュア（例へばビン・マニユファクチュア）と混成的マニユファクチュア（例へば時計マニユファクチュア）に分けた。

右にのべた混成的マニユファクチュアの場合には、家内制大生産もしくは分裂的マニユファクチュアが組織されやすい。第一に、その工程が組立式であるという特質によつて、第二に主としてチープ・レーバーであることによつて。(註二)。

(註)

一、「發達」下、一四八―一五四頁

二、同九〇頁

六、以上、二つの道は、そのいつれの経路がたどられるにせよ、産業資本主義は發達するという前向きの問題として提起されている。それゆゑ、問題はいすれにしても資本主義の、従つて、資本と賃労働との基本的矛盾の展開が「革命的の急速か、改良的に漸次的か」といふふうに出されてくる。であるから中世紀的諸關係の殘存や商業資本の網の目が資本家的搾取、労働の社會化、生産手段の集中を、おゝいかくしているマニユファクチュアの時代において、産業資本と商業資本との密接な結合をこそ分析すべき時に、兩者をきりはなして對立せしめ、産業資本は「進歩的」(「資本主義の歴史的使命」)だが商業資本は「阻止的」であると考へつゝ、二つの道の問題をとらえ、これを「資本主義の發達かそれとも資本主義の阻止か」といふふうに出してはいけぬし、なおさら「封建的生產様式か資本家的生產様式か」といふふうに出してはならない。

七、レーニンがマルクスの二つの道の理論を、國民經濟Ⅱ國內市場の觀點からヨリ具體化し、これをマニユファクチュアの發生過程の相異なる種類としてつかまえた。しかし、これは、レーニンによつてブルジョア民主主義革命の途上における農民問題という見地から定式化されかつ具體化された、農業資本主義發達の客觀的な可能な道としての二つの経路、農業危機を克服するための二つの型に關する理論(註一)から區別されねばならぬ。それゆゑ、兩者をたゞちに同視するのは誤である。(註二)

第一、農業生産力のブルジョアの進化にかんする二つの道の問題は、農民經營のブルジョア化を先頭とする革命的にして急速なかつ自由なアメリカ的發展と、地主のユンゲル經營を先頭とする、改良的にして緩慢なかつ直接生産者にとつて苦難にみちたプロシヤ的な發展との間の斗争として、したがつてまた、農業危機の克服をめぐる農民的農業革命Ⅱ土地革命と地主的土地改革との、二つの型の間の敵對的な階級斗争として提起されている。封建制は農業生産を土臺としており、農業の主要な生産手段である土地、農業における資本制生産の自主的發達にもなう地主と全農民との間の、二つの道Ⅱ型の斗争は、直接的に權力のうちにもその政治的對應關係を見出す(生産様式Ⅰ階級關係Ⅰ國家權力)。たとへば、それはロシアのブルジョア民主主義革命においては、封建的身分的大土地所有關係をその物質的基礎とするツァーリズム權力をめぐるつての、農民Ⅱ農業企業家の中央集權的ブルジョア共和國と地主Ⅱユンゲルの中央集權的立憲君主國との斗争として表現された。だから、土地革命と土地改革とは、それぞれこれに對應する新しい權力の下にのみ遂行される。そして、社會主義革命によつてのみ解放されうる労働者階級が、アメリカ的な経路、農民的農業革命の型を支持し、そのために農民を啓蒙するのは、この過程において労働者、農民の同盟を確保すると共に、ブルジョア共和國の實現が社會主義への不可缺の經過點だからであつた。

しかし、工業における資本制生産様式Ⅱマニユファクチュアの形成にかんする二つの道は、國家權力との直接的對應關係をもつていない。それは、商業資本がたとへ舊生産様式を解體せしめることができても、それ自體では新生産様式をつくりだすものでなく、また、舊生産様式にとつてかわつてどんな新生産様式が出現するかは與えられた歴史の發達段階にかかわつていからだ。たとえば、近代世界においては商業的作用と商業資本の發達は資本制生産に結果したが、それは商業資本Ⅱ流通そのものの性質にかかわることでもなく、封建的農業や手工業の生産様式、孤立的分散的な小商品生産の解體の結果にはかならぬからだ。

第二、しかし、農業においても工業においても二つの道の理論は、ともに資本主義發達のテンポにおける革命的な急速な経路と、改良的な緩慢な経路を指摘している點で同一である。

(註)

のこと

一、農業資本主義發達の二つの道については、とくに*レーニン二、*守屋典郎「資本主義論争の系譜」大學刊號、六四頁に、
ン、「ロシア農業問題」改造社版、八七七頁、註一〇六を参照。おける筆者への批評には、かゝる誤解が前提となつてい

八、マニユファクチュアの經濟構造は、産業資本と商業資本との密接かつ不可分の結合を特徴としてい。この社會的生產形態は、大作業場Ⅱ産業資本を頂點とするマニユファクチュアと問屋Ⅱ商業資本を頂點とするマニユファクチュアとの結合からなつてい。ところで、産業資本と商業資本との發達は反比例するといふ法則にしたがい、一般的にいへば、産業資本が機械および大工業の段階に發展すれば商業資本Ⅱ問屋を頂點とする「問屋制家内工業」は消滅せざるをえない。さて、絶對主義權力が農奴制の遺物、その權化としての封建的大土地所有を維持し、農業における資本主義の不可避な發展に直面して、プロシヤ的経路を支持し補充することによつて、アメリカ的経路を壓迫し買収する

ような場合、農民層の分解もまた緩慢にそして未熟にならざるをえない。このように、封建的大土地所有にもとづく半隷農的小作制が経済制度として国民経済の中にくみいれられ、それが権力にたすけられつゝ農民的小商品生産を壓迫している国民経済および産業部門においては、そしてその上に独占資本主義が重層を加えていけばもちろん、資本主義的生産様式の自生的發達は小營業及びマニユファクチュアの發達段階・生産形態に緊縛され、停滯せしめられる。

このようなマニユファクチュア形態の廣汎な残存は、商業資本の事實上の産業資本への轉化の経路と形態とを存続せしめる。この道は、新しい生産様式をつくり出さないで、つねに野蠻な高利貸制と劣悪な労働諸条件とを満身にまとうている。しかも、この場合、一國における資本主義の全體の發展段階に應じ、マニユファクチュアは大工業資本、さらには独占資本に從屬せしめられている。

レーニンは、農業におけるプロシヤ的發達の道と、工業における商人的發達の道との、十九世紀末ロシアにおける絡みあいについていふ――

「雇役制度と資本家制度との結合は、地主經濟の今日の構造を、機械的大工業の出現前に我國の織維工業を支配していたところのあの構造に、經營的組織よりみて、極度に類似したものたらしめている。彼處（織維工業）では、作業の一部分を商人は自己の道具と賃労働者によつて遂行した（紡糸の經糸作り、着色および織物の仕上げ等）が、一部分は、彼のために彼の材料で働いたところの農民ハクスターリの道具によつて遂行した、こゝでは作業の一部分は地主の農具家畜類を使用しつゝあるところの賃労働者によつて執行され、他の部分は――他人の土地で労働しつゝあるところの農民の労働と農具家畜類によつて執行されている。かゝるこゝでは商業資本は産業資本と結合しており、而してクスターリの上には資本のほかは、カバラ、仲買業、實物労働制度等々のしかかつていた。此處でも全く同様に、商業資本および高利貸資本は生産者の賃銀の低下と人身的從屬の強化と

のあらゆる種類の形態をとらなつて、生産資本と結合している。彼處では牛の原始的技術を基礎とするところの過渡的の制度が數世紀にわたつて保存され、そして、約三十年間に機械的大工業によつて破壊された。此處では雇役は、陳腐な技術を不朽に傳へつゝ、殆どロシアの始め以來存続し（地主達はすでにルツスカヤ・プラーヴダの時代に賤奴を隷屬せしめた）。而して改革後の時代になつて漸く、資本主義に急速に地位を譲りはじめつつある。かゝるこゝにおいても此處においても、舊來の制度は生産の諸形態（従つてまた、あらゆる社會的關係）における停滯とアジア的狀態の支配とを意味するにすぎない。かゝるこゝにおいても、こゝにおいても、經濟のあらゆる資本家的形態は、それに固有なあらゆる矛盾にもかかわらず、一大進歩である。」（「發達」上、二五六―二七頁）

九、資本主義的國民經濟においても個々の生産部門におけるマニユファクチュアの段階・形態においては、その部門の歴史的條件のいかんにより商業資本の事實上の賃労働支配と産業資本の支配とは結合している（例へば、ロンドンの家具商の場合のように）、しかし、産業資本の不可避的な發展、したがつてマニユファクチュアから大工業の段階への展開は、このよりの商業資本の支配を消滅せしめる。商業資本は産業資本へ從屬し、單なるそのエージェンツとなる。それゆゑ、大工業の段階における産業資本の「外業部」としての「資本制家内労働」と、マニユファクチュア段階における間屋資本の一構成部分としての「資本制家内労働」とは區別されねばならない。なぜならば、たとへ大工業資本とその「外業部」ととの間にいくつかの商業資本（「ブローカー」「下請業者」「製造業」など）が企在するとしても、もはやこれらの商業資本は、マニユファクチュアの段階において産業資本といわば對等に結合しているのでなく、大工業段階における産業資本の代理店にすぎず、その剰余價值の一部を平均利潤のための競争への參畫を通じて擷取するにすぎないからだ。大工業の段階においては生産は流通を屈服せしめるからだ。

しかも、独占資本の段階においては、産業資本すらも、金融資本に融合支配されてしまふ。わが國のように、半封

建的大工地所有の残存が農業における産業資本の發達、したがって農業からの加工業の分離を阻止し、緩慢ならしめ
ている場合には、小營業やマニユファクチュアが廣汎に存続せしめられている。それゆえ、小營業にたいする商業資本
の支配の種々の形態や、産業資本と商業資本との密接な結合がほとんど加工精製業の全域にわたつてくりひろげら
れている。しかも、それがマニユファクチュアや大工業の段階・形態にある産業資本の「外業部」としての「資本制家内
労働」と相互にもつれあい、全體としてそれぞれの産業諸部門における獨占資本の支配の網の目にくりこまれてい
る。一見獨立しているように見えるところの、孤立的な分散的な小商品生産者・「家内労働者」、街工場などは、大小
の産業資本・商業資本の媒介を通じて、獨占資本のために收奪され、壓迫されているのである。

(11)

資本主義の基本的矛盾に對する「大塚」史學の理解は、歴史の發展にたいするその態度と、緊密な内面的關連をも
つている。「大塚」史學は資本制生産における生産の社會的性質と生産の結果の資本家的所有との矛盾、労働者階級と
資本家階級との敵對的對立のかわりに、ウェーバー・マントウ・アンワインなどと共に資本制生産Ⅱ産業資本と流通
Ⅱ商業資本との「對立」をおく。それゆえ、「大塚」史學は歴史の運動法則を歴史的生産に内在する對立物の斗争とし
て、内在的原動力にもとづく自己運動としてつかまえることができず、生産にとつて外部的な前期的資本Ⅱ流通の
中に、あるいは「精神」の中にその原動力を求めてゆく。

ここでは、マルクス經濟學の觀點から資本制生産Ⅱ産業資本の發展に對してもつ經濟的地位(進歩と限界)を確定
し、「大塚」史學の「前期的商業資本」論に對して簡單な論評を加えておく。氏の二つの道の理論に對する誤りを明ら
かにするといふ目的の範圍内において。

(一) さて「大塚」史學の最近における、「前期的」資本論をうかがおう。まず、氏はいう――

(二) 「資本」によるものを極めて抽象的形式的に解して「自己増殖する價值」或いは「層平たく『營利』(Geldvererb)な」と規定したとするならば「資本」の存在は……人類の歴史と共に古い。

「資本」なるものは決して近代的資本主義的な性格のものばかりでなく、或いは「封建的」なる資本「奴隸制的」なる資本「アジア的」なる資本も亦見出される。「即ち、世界史における社會の經濟構造の各發達段階はそれぞれ自己の特殊歴史的な性格に相應する所の『資本』をもつ」。

マックス・ウェーバーは「中世封建社會においてもまた資本の作用が極めて明らかに『封建的』なるものの形成と維持を指向していた點を繰返し指摘している。とりわけ中世封建社會、就中イギリス封建制の場合には、コスミススキー及びボスタンの最近における研究が『資本』の存在と活動が封建的土地所有の進展をば力強く推し進め且つ封建的土地所有の崩壊に際してはそうした『資本』も亦これと運命を共にしつつ没落の途を辿つてゐるといふ史實を興味深く教へている。』

(二) 「それぞれの發展段階の持つ『資本』の歴史的性質をできるだけ正確に把握するには、第一は歴史的史實的にそれぞれの『資本』の歴史的性質を大極みに把握してゆくことである。第二は社會學的理論的に各發達段階における『資本』の運動法則をば一般に規定することである。實はこうした觀點からするならば凡そ『資本』とよばれるものは、一方における近代・資本主義的な資本と、他方における『封建的』・『奴隸制的』・『アジア的』のすべてを含めての『前期的資本』に二大別される。『こうした『近代的』な資本と對比せしめられる所のあの『前期的資本』の運動法則をば、社會學的理論的に十分に究明しておかればならぬ』かように性格の『前期的資本』の存在が確認され且つその法則性が理論的に究明されている場合、……近代以前」の經濟史と所謂「後進」諸國の社會的經濟構造の正確な構造的理解が可能となるであろう。」(以上同氏「資本の封建性と近代性」帝大新聞一九四六・七・九號)

右において、氏は、第一に「前期的」資本は前資本制社會の世界史における社會經濟構成の繼起的な發達段階に存在し、「社會學的理論に」各發達段階における「資本」の運動法則をば一般的に規定する」といふ觀點に立つと、資本

は「前期的」資本（商業資本および高利貸資本）と「近代的」資本（産業資本）とに大別されること、第二に「前期的」資本は「近代的」資本とは別個の「運動法則」をもつこと、をのべている。つまり、ここでもつとも重要なのは、氏が「社會學的理論的」に「前期的」資本の「運動法則」を「一般的に規定」しうる、とのべている點だ、つまり、氏は「廣義の經濟學」的見地と「狹義の經濟學」的見地とを混同し、前者を後者からきりなして、對立させてしまふ。

換言すれば、「前期的資本」（商業資本・高利貸資本）は、産業資本Ⅱ資本制生産以前のあらゆる階級社會に存在するから、これらの前資本制的社會經濟構成にわたつて妥當する法則をもつというのだ。

しかし、いふまでもなく、歴史的發展法則は一定の特殊の構成體に固有なものである。その法則は當該社會構成體の下部構成としての生産様式（生産力と生産關係との統一）に内在する基本的矛盾を原動力として自己運動するところの法則である。前資本制生産様式の法則は、従前の規模における、従前の基礎における生産過程の反覆であり、地主の賦役經濟、農民の自然經濟、加工業者の手工業的生産はそうであつた。これに反して、資本制生産の法則は、生産様式の不斷の革新と生産規模の無制限的擴大である。そして、商品資本制生産Ⅱ産業資本に固有の運動法則は價值Ⅱ生産價格法則であり、かつ、産業資本と商業資本とは全く同型の經濟的現象である。

「」さらに、立ちいつて、氏のいわゆる「前期的」資本の「一般的」な運動法則をきこう。氏はいふ――

「前期的」資本の運動法則は、左のすべての點で産業資本のそれと對立する。

第一、「近代的なそれと異つて、資本の生産過程を有つて居らない。」

「前期的資本が生産過程を有たずして利潤を獲得するとなれば、それがひとまづ流通過程からである事は瞭らかであらう。而して流通過程から利潤が獲得されるとすれば、等價交換ならぬ等價交換、即ち價值以下に買つて價值以上に賣るといふプロセス以外

外では不可能である事も瞭らかであらう。前期的資本が存在し且つ自己増殖の活動を行うのは、まさしく、こうした非等價交換の地盤の上に於てなのである。「近代以前の發展諸段階における生産力の低さ、その直接の結果としての交換物資の量の少さと交通關係の未發達、更に又こうした生産力の低さに相應する社會諸關係から歸結する所の商品流通に對する諸種の妨害——山賊・海賊をはじめ關所・道路強制等に至るまでの——の結果として地域的にも時間的にも價格は極めて偶然的に決定され、一市場一價值法則は到底實現しうる可能性なく、その結果として絶えず非等價の交換が行われる。「即ち價值法則（等價交換への必然性）が、生産力の低位とそれに相應する經濟的諸制約の故に、自己を實現せんとして而もその實現を妨げられていふ勝れて假定的な状態、こうしたものこそ前期的資本が利潤を獲得するために不可欠な前提条件であつて、こうした地盤の上には、價值以下に買つて價值以上に賣るといふ非等價交換によつて、流通過程から利潤を抽出する。」かゝる意味での前期的資本の活動は「經濟的ではなくむしろ經濟外的強制なる歴史的性格をけらんでいる」。

第二、「前期的資本は、或いはアジア的な或いは奴隸制的な或いは封建的な、ともかく近代以前の生産過程において作出されるところの餘剰生産物をば、非等價交換の流通機構を通じて貨幣形態で獲得するのである。「前期的資本は自己特有の生産過程を有つてではなく、むしろ近代以前の——アジア的なであれ奴隸制的であれ封建的であれ——生産諸様式の上に寄生し、そうした生産過程において作出されたところの餘剰生産物をばだゞ分け取るに過ぎない。要するに前期的資本は本來寄生的な存在なのであり、従つて、その利害は窮極的には自己の活動の基礎たる在來の生産諸事情のそれにつねに一致せしめられておるであつて前期的資本の所謂無性格性や保守性反動性等の諸性格もこゝから當然に歸結してくるのである。念のためにいつておくがかような寄生的無性格の資本がいかに發達しようともそこから近代的な産業資本やその基礎たる近代的生産様式が生まれて來るものではない」。

第三、「前期的資本の代表的な形態は商業資本及び高利貸資本」であり、「その活動の中心はむしろ流通過程の裡にあり、非等價交換の可能性を利用して省略や偽購、時には強力によつて廉く高く賣ること——あの掛値と値切りの掛け引きや腹巻や押賣り、——こそが本領なのである」前期的資本の利潤は、近代のそれと異つて、本來的に商品の裡に胎れているのではなく、むしろ省略及び偽購によつて外側から獲られるものであつて、しかもその成否は全く偶然的な事情によつて決定される」したがつて、

「前期的資本家が絶えず貨幣を流通過程の外に引き出し、貨幣財産として推積しようとする。

第四、だが「前期的資本は右のような活動の結果としてともかくも商品流通の範囲および密度を擴充することとなる」特に社會的生産力の擴充によつて……それが裏付けられた場合、この傾向は決定的に推進され、而してその當然の結果として價法則は自己を貫徹し、等價交換が一般化するようになる。……そこで、實態がここに到ると、前期的資本はその保守性を露けにして反動的に舊來の事情、就中、生産事情を維持しようとする。その方法はある近世初期のヨーロッパに特徴的にあられた「獨占」であり、更にかの問屋制度も亦こうした獨占の一つの特殊形態にほかならない。

第五、「こうした前期的資本の發達の中から近代の産業資本やその基礎たる近代的生産様式は決して出て来ない」「歴史上前期的資本が産業資本に轉化する事例は充分に見出され得る。しかしそれは産業資本形成の自主的な途でも自律的な轉化でもなく且つ、こうした系統の産業資本は前期的資本の性格を決して捨て去ることなくして、舊來の近代以前の社會的生産的諸事情と豪末も矛盾することなく充分にそれと共生しようとするものである」という事實を忘れてはならない。(以上、同氏「前期的資本の歴史的性様」帝大新聞一九四六・八・二三號)

三、以上の所論を整理すればこうだ。第一、産業資本と「前期的」資本(商業資本・高貸資本)は同型の經濟的現象ではない、というのは前者は經濟的性格をもつが後者は「經濟外的強制」という歴史的性格をもつからである。それゆえ「前期的」資本の「利潤」は商品交換の一般法則である價法則にもとずいて抽出されるのでなく、商略・欺瞞・強力によつて抽出される。第二、産業資本と商業資本との相異は、前者が生産過程をもつのにたいして、後者がこれをもつていないことにある。第三、「前期的」資本は與えられた生産様式に寄生するばかりで、それ自身では新しい生産様式を決してつくり出さない。それゆえ、それは「保守性」・「反動性」をもつ、たしかに「前期的」資本は商品流通の範囲・密度を擴大することによつて資本制生産の不可缺の前提条件となるが、産業資本が形成されてくるとこの「保守性」・「反動性」はますます露骨となり、ついには「獨占資本」となり「問屋制資本」といふ形態で舊來

の生産事情を維持しようとする。第四、なるほど、歴史上「前期的」資本が産業資本に轉化する事例は充分に見出されるが、こうした「系統」の産業資本は決して「前期的」資本の性格——「經濟外強制」という歴史的性格——をすてるものではない。

さて、右のような「大塚」史學の見解は正しいか？ 否、それは正しくない。

四、第一、「大塚」史學は、「前期的」資本(商業資本・高貸資本)も産業資本と共に、利潤を得て賣るための商品の購入という一般的公式に包括される同型の經濟現象であることを理解しない。だから、商業利潤を單なる「商略」や「欺瞞」の「經濟外的強制」によつて説明し、その經濟的本質をみようとしなない。商業資本は、大量的販賣の價値と小販賣の價値との差額から利潤を引き出すのであるから、あくまで生産物の買入と販賣とは商品交換の一般的法則によつて行われるということ为前提として利潤の形成を説明せねばならぬ。小商品生産者にたいする商業資本の支配はこのような經濟的原因——分散的な小販賣にたいする大量的な大販賣の純經濟的優越性——にもとずいて立ち立てられるのだ。「この經濟的原因のみが商業資本が實際において取りかつ極めてありふれた詐欺も不斷にそのなかにおいて見受けられる(このことはならぬ疑う余地がない)ところの、種々雑多の形態を理解するための鍵を與えうるのである。これと反對の態度をとること——通常ナロードニキがするやうに——すなはち「クランク」の瞞着を指摘することに止まり且つこれを基礎にしてこの現象の經濟的性質の問題を全く無視することは、俗流經濟學の見地に止まることを意味する。」「(發達)下巻、四三頁、なお「資本論」第一卷、(上)、一五五頁、三七頁の註三七、同三卷上、二八八—九頁、二九五頁参照)。

第二、經濟學上、商業資本と産業資本との區別は次の點にある。即ち前者は同一の商品を利潤を得て販賣するため

に商品を買入れるに對し、後者は商品を加工された形で販賣するために商品を買入れること、したがって原料その他および原料を加工せしめる労働力を買入れることにある。「大塚」史學のいわゆる前者は生産過程をもつが、後者はこれをまたぬといふ點はこれだ。それだからといって、生産上の搾取が「前期的資本」の搾取の「後ろめたさ」(大塚氏のことば)によつて、いんべいされ合理化されてはならない。

最後に、氏の第三、四の見解に對する批判をもふくめて、産業資本の發達という前向きな觀點からとらえた、商業資本にかんするマルクスの基本的命題を「大塚」史學の商業資本論に對置しよう。

五、商業資本は理論的にも歴史的にも資本の最初のもつとも自由な存在形態である。一般的には資本の、特殊には商業資本の存在條件は、商品Ⅱ貨幣流通の存在である。つまり、あらゆる資本の出發點は、一定量の貨幣の集稱であり、個々人の掌中における自由な資金(個人的消費にふりむける必要のない資金)の形式である。商業資本の出現の條件は、第一に小生産の分散性・孤立性、かれらの間における経済的不和と斗争との存在、第二に、小規模的な分散的な生産に照應する小販賣と擴大する市場との矛盾がこれである。その場合、商業資本はこれらの小商品生産のうちから分出されるのであるが、小商品生産にたいする商業資本の支配は純經濟的法則にもとづく。商業資本は、貨幣財産の集稱をもたらし、商品生産のために大規模な市場を組織し、商品生産を普及することによつて、資本制生産Ⅱ産業資本のための歴史的前提をつくる。

商業資本および高利貸資本の役割にかんする、マルクスの經濟學の基本的命題はつぎの點にある。

第一、商業資本および高利貸資本と産業資本(生産に投ぜられた資本であつて、農業たることを洵はぬ)とはともに、利潤を得るための商品の購入という一般公式に包括される同型の經濟現象である。

第二、商業資本および高利貸資本は歴史的には産業資本の成立に先行し、論理的には産業資本の成立のための不可欠な條件であるが、それ自體としては商業・高利貸資本は産業資本の成立のための充分な條件ではない。それは舊來の生産様式をほりくすが、これにかへるに新しい資本家的生産様式をもつてするものではなく、後者の成立に歴史的發展段階と考へられた諸事情に依存する。

第三、商業資本の獨立的發展は資本家的生産の發展の程度に逆比例する、すなわち、商業資本および高利貸資本の發展が強ければ強いほど、産業資本(Ⅱ資本家的生産)の發展はますます弱い、そしてその逆はまた逆である。

大塚氏によつてしばしば引用されるところの「商人資本にかんする歴史的事項」の章において「資本論」第三卷第四篇(第二十章)右の理論的命題とくに「逆比例」の法則を、ヨーロッパにおける資本制生産の繼起的段階的發展という世界史的觀點から實證している。

即ち第一に世界史的に資本制生産がまだマニファクチュアにも達しない極めて低い段階において商業資本が獨占的に發展し、この法則が「歴史的もつとも著しく現われている」事例として、この段階におけるヴェニス人、ジェネバ人、およびオランダ人の「仲立ち商業」が、經濟的に未發達な諸共同仲間の生産物を媒介し、生産國の兩方から搾取することによつて主要な利潤をあげたが、これらの被搾取民族の經濟的發展が進むに比例して、商業の獨占、商業それ自身の存在・商業諸民族の優越・商業的富一般が減じたことをあげてゐる。(同、二八七頁)

第五に、マルクスは「逆比例」の法則を、資本制生産の世界史的なマニファクチュア段階との關連において考察するか。これによれば十五世紀中葉の地理上の諸發見以來の商業資本の急速な發展、商業上の大革命、世界市場の突如たる擴大や流通諸商品の倍増やアジアの諸産物およびアメリカの資源を掌握しようとするヨーロッパ諸國民間の競争熱や植民制度などが生産の封建的諸制限の破砕に本質的な貢獻を行い、世界史的封建的諸制限の破砕に本質的な貢獻を行い、世界史的封建的諸制限から資本制生産様式への轉化を促進する一つの主要な要素であるのはたしかだ。とはいへ、前進の理由により「近代的生产様式はその第一

の期間たるマニユファクチュア時代において、中世紀の間にその条件がすでに造り出されてあつた所のみ發達した。たとへばポルトガルに比して、オランダに近代的生産様式が形成されたのは、漁業や製造業や農業に基礎をおいているのである（*同、二九〇―二九一頁）。

第三にマルクスは資本の大工業の段階において、商業資本ははじめて産業資本に從属することをのべている。かれによれば、十六世紀中一部の十七世紀に及んでも、商業の突發的擴大と一つの新世界市場の創生とは、舊生産様式の滅亡と資本制生産様式の興隆とにたいして壓倒的な影響を及ぼしたが、これけすでに形成された生産様式マニユファクチュアの基礎の上に行われたものだ。（ここでマルクスは、すでにマニユファクチュア時代においては、商業資本が主導する市場と、産業資本が主導する市場とのからみあいを指摘し、資本制生産の發達にともない、前者が後者によつて壓倒されてゆき、ついに大工業の段階において商業資本が産業資本が單なるエージェントとなり、流通が生産の單なる一段階として含まれている點を、世界的に實證している。）
というは、不斷の擴大再生産という資本制生産の内在的法則は、世界市場の不斷の擴張を刺戟し、商業が産業を革命するのでなく、産業の支配は、逆に大工業の諸條件に左右されるようになる。イギリスがオランダに優越したのは、そこにおける封建的土地所有の徹底的な解體が資本制生産様式を急速に發展せしめたからだ。また、支配的な商業國民たるオランダの滅亡史は、同時に世界的に商業資本が産業資本の下に從属するに至つた歴史である（*同、二九二頁）。「マニユファクチュアさらに著しくは大工業が、ある程度まで強固となるや否や、それがまた市場をつくりだし、その商品をもつて市場を征服する。商業はいまや産業的生産の召使となる」（*同、二九四頁）。

マルクスは、このように「逆比例」の法則を純經濟的現象として説明したのであるから、そこには「前期的資本」の「經濟外的強制」とか「反動」などという「社會學的」理論はない。

六、さらにレーニンはロシアの國民經濟的統一、大工業のための國內市場の形成過程という規點から、アジアにおける資本制生産の繼起的發展段階との關連において、右の諸命題をヨリ一層具體化した。

第一に、かれはロシアの農民層の財産上の分化、および階級分化の資料について分析し、小營業的農民が絶えず商

業資本を分出せしめていることを實證した。

そしてロシアにおいては商業・高利貸資本は産業資本と結合しているか、それは舊來の生産様式をほりくずしつゝ、その代りに資本家的生産様式もしくは何か他のものを招來しているかという角度から、マルクスの基本的命題をロシアに適用した。そして、第一に農民が生産を擴張するために勞働力を購買しよう（産業資本）と土地・雜貨・大麻・乾草・家畜（商業資本）もしくは貨幣（高利貸資本）を取引しようと、かれらはそれ自身同一の經濟的類型を示し、その義務はその根本において同一の經濟關係に歸着することを實證した。第二、ロシアの土地共同體農村においては富農の手における資本は單にカバライと高利貸業として機能するに止まらず生産へも投下されていること、を示した。換言すれば、資本はロシアにおいて單に商業・高利貸資本としてのみ機能し、したがつて全農民は單に「窮迫」せしめられた齊一的な類型（例へば、「窮迫」せしめられた「半農收的零細耕作農民」一般）として現われ、商人・高利貸は全農民の間において貨幣的財産の大きさによつて區別されるにすぎないものではなく、富農は資本を同時に産業資本として投下しており、したがつて全農民層は單に分化しているのでなく階級的に分解しており、その生産の大きさや組織からいっても他の農民から區別されていることを實證した。

第三に、かれはロシアにおける商業・高利貸資本の獨立的發展は、農民層の分解を阻止することを命題をたて、そして商業が農村を都市に接近せしめ、村の小賣商の獨立的地位を爆破しつつ、高利貸を發展すればする程驅逐しつつ規則正しい信用形態が發展すればする程、農民層の分解がいよいよ廣くかつ深く進む。富農の資本は小取引・高利貸業から放出せられますます大規模に生産へ投下せられることを實證した。

しかも、レーニンはマルクスのこれらの基本的命題をロシアに適用し具體化するにあつて、つねにナロードニキ

の偏見をたたかつた。

クスターリリ小商品生産者の狭隘な觀點にとらわれていたナロードニキは、第一に「クラーク」(商業高利貸資本)の「偽購」を指摘するだけに止まり、クスターリに對する商業資本の支配の經濟的性質、すなわち、商人が生産物の賣買を商品交換の一般的法則にもとずいて行つたと假定しても、大量的販賣の價值と小販賣の價值との差額によつてかれらの利潤を獲得するということを見失つてゐる。

かれらは、大市場生産の下においては分散的な小販賣は絶體的に不可能であること、小生産者たちの分散性とかれらの完全な分解(かれらはつねに産業資本および商業資本を生み出している)との下においては、大販賣は大資本によつてのみ組織されるのであり、そしてこの大資本はこれによつてクスターリを完全な無援と隷屬とに陥れることをみる事ができず、組合によつて販賣を組織化することによつて「クスターリ」を援助しようとするという理論をたてた。ナロードニキのかゝる理論は、商品生産と資本家的販賣との間の純經濟的な不可分の關連を理解しえぬことにもとずく。

第二、ナロードニキは「クラーク」リ商業・高利貸資本の「クスターリ」リ農民にたいする「偽購」のみを泣訴するに止り、「クスターリ」が産業資本家と商業資本家とを分離し、したがつて單なる流通關係における財産上の分化のみでなく、生産關係における階級上の分解をも遂げつつあることを研究しようともしなかつた。それゆゑ、かれらは「クラーク」リ商業・高利貸資本と「經營上手な百姓」リ産業資本とは、同一の經濟現象の二つの形態でなく、相互にキリはなされた對抗的な型の現象であるとのべた。それゆゑ、マニユファクチュアの段階の特徴である商業資本と産業資本との結合、「分化」と「分解」との關連をみる事ができなかつた。それは、正に關連をみるべき時に「對立」を

みることによつて、一方では大經營と小經營との間の、他方では商業資本と産業資本との間の聯關をいんべいしてしまつた。

(三)

「大塚」史學は、氏自らも指摘するように、マルクスの二つの道の理論を「古典的な規定」(註1)とよび、これにたいして、「國における資本主義の發達を具體的につかむための方法論的意義をあたえている。それは、「大塚」史學の全體系を貫くところの、基幹的な方法となつてゐる。それゆゑ、以上の觀點から、「二つの道」の理論にたいする「大塚」史學の理論的把握、歴史的具體化が正しいか否か、徹底的か否かは、この史學の全體系にかゝる問題なのである。

一、氏は封建制生産様式から資本制生産様式への轉化を「前期的」資本から産業資本への轉化といふふうにつまづ、いふ。

「前期的資本は『生産への喰込み』『生産過程の征服』によつて初期的産業資本へ轉化する。即ち、その循環の中に『資本の生産過程』を含むことによつて、あるいは『本來の「産業」資本の循環形態』をあまり所なく含むことによつて、範疇的推轉をとげるのである。しからばこれはいかなる形態の下に行われるのであるか。大づかみにしてわれわれはそれを「大別、即ち問屋制家内工業とマニユファクチュア」と「大別しうる」(同氏、「資本主義の系譜」三四頁)。

右に引用した所で大塚氏は、封建的生產様式から資本制生産様式への轉化の二重の歴史的経路、マニユファクチュア發生の二重の歴史的経路にかんするマルクス・レーニンの「古典的」理論(大塚氏)を、なによりもまず、「前期的資本の産業資本への轉化」の二重の経路にすりかえてしまふ。マルクス・レーニンにあつては封建制生産と資本制生産との、歴史的に全く異なる發展法則をもつ二つの繼起的な生産體制の間に劃期的な「轉化」が行われる。それゆゑ、こ

の「轉化」の問題は、一般的には、生産様式・階級関係・國家權力をふくむ全社會構成體の「社會革命」が急速に行われるか緩慢に行われるかの問題であり、特殊的には、封建制の胎内において自生的に形成される資本制生産様式が急速に革命的な形態で行われるか緩慢に改良的な形態で行われるかの問題である。この「轉化」は一方では歴史的発展における生産關係の飛躍であり、他方では生産力の中に内面的な繼起的な關連をもつてゐる。この轉化・發展の原動力は生産の内部にひそむ矛盾である。

ところが、大塚氏にあつては、「轉化」は「前期的」資本（流通）と産業資本（生産）との間に行われる。氏によれば「前期的」資本は自らの「經濟外強制的」發展法則をもつのであるから、「前期的」資本がこれと全く別個な「經濟的」發展法則に支配される産業資本へ「轉化する必然性」をもつのだ。「前期的」資本とか「アンシャン・レジーム」とかは、氏によつて特別の「社會構成體」であるかのように表象されているが、それは敘述するやうに、資本主義が古い手工業的技術を基礎として立つており、したがつて無数の中世紀的諸關係によつてからまれてゐる原始的段階（氏が十年前にいわたる「初期資本主義」を意味するのだ。しかし、流通Ⅱ「前期的」資本と生産Ⅱ産業資本との間には、繼起的な關聯性は存在しない。兩者はそれぞれ別個の發展法則をもつものではない。流通の運動を規定し、性格づけるものは、生産體制の基本矛盾であり運動法則にはかならぬ。そして、流通はむしろこの矛盾をいんべいしてしまふ。

二、氏は、個別的資本の見地にとらわれるがゆえに産業資本Ⅱ資本制生産すなわち全資本家階級による全労働者階級にたいする搾取關係といふ世界的な全機構的な觀點から、産業資本を捉えることができません。これを個別資本の營利のための「經營形態」に矮小化する。そして、小商品生産者ないしマニユファクチュア資本家すなわち氏のいわゆる「生産的生産者」の見地にとらわれるがゆえに、産業資本を賃労働ではなく商業資本に「對立」させてしまふ。そ

では、「マニユファクチュア」や「問屋制家内工業」は、資本制生産の逐次的な發展段階・社會的生產形態ではなく、個々の資本家が「營利」を追究するための手段であり、「經營形態」にはかならぬ。すなわち、氏はいう――

「範疇的推轉」は「問屋制家内工業」と「マニユファクチュア」とに大別される。「問屋制家内工業」の形態で「推轉」が行われる場合には、「前期的資本家が、一、商品の販路を獨立小生産者――ギルドの親方であれ、職人であれ、また農民であれ、――より遮斷し、二、且つ高利貸的な前貸 *advance* の機能によつて、かれらを自己に依存せしめ、また生活資料（後の賃銀部分）以外の原料・道具等の所有権を喪失せしめ、もつて自ら事實上の産業資本家となり、従來の獨立小生産者を事實上の賃銀労働者たらしめるところの形態」をとる。かゝる「經營形態」の本質的特徴は、「第一に、その生産過程がまだ資本家の所有にかゝる一大職場において営まれずして、各家内工業者の所有にかゝる、農村乃至ギルド傳來の職場において分散的に遂行されることである。第二、資本家が直接に『素面』の産業資本家としてあらわれずして、一應商業資本家として各家内工業者に對立し――もつとも進んだ形態にても――生産手段（原料および道具）が前貸なる形で供給せられることである」(* 同、三四頁)。なお、この場合次の三事實が注意されねばならぬ。第一、これらの家内工業労働者の間には問屋資本家を組織者とする「分業にもとづく協業」が成立しうる、この場合には本來のマニユファクチュアに「近迫」してゐる。第二、とくに都市の「家内工業者」ギルド親方の職場の規模が擴大されて「獨立性」を恢復しマニユファクチュア資本家となる場合（イギリスやオランダの羊毛工業）と、そのまゝ獨立性を恢復せず後の「苦汗制度」のようになる場合とがある。第三、「問屋制」資本には前期的商業資本制があるから「それ自體は舊來の生産方法をむしろ自己の存在の前提條件として維持する傾向をもつ」。だから「眞の資本家的生産（マニユファクチュア・工場）の發達にしたがつて廢滅に歸せねばならない。即ち『問屋』商人自身がマニユファクチュア所有者となるか、あるいは先述の如くその中には含まれた『初期のマニユファクチュア』がかゝる組織を破壊するに至る力である。そうでないと、『苦汗制度』として殘存する」(* 同、三七―三八頁)。

第二の形態は「マニユファクチュア」である。氏によれば、「これが眞に前進的な形態、眞の資本家的生産方法である」。「問屋制家内工業」と對比した場合の特質は、第一、範疇としての「賃労働」の成立、第二、「資本家の所有にかゝる」職場における協

業」とその内部における分業である。注意すべきは、このマニユファクチュアはギルド的小職場の否定として「單純な資本家的協業」初期のマニユファクチュアの展開の結果である。

三、右の引用によつてもわかるように大塚氏にあつては「二重の経路は、相互に對立し闘争するものと考えられている。もともと、氏にあつては産業資本と商業資本とは、きりはなされて社交せしめられているがゆえに、これは當然の歸結である。だから、「二重の経路は、商業資本Ⅱ保守が、産業資本Ⅱ進歩が、したがつてまた「問屋制資本」Ⅱ保守が「マニユファクチュア」Ⅱ進歩かというふうに出される。しかし、いまわれわれにとつて、問題となつてはマニユファクチュアの相互に相異なる重の経路である。二つの道は共に、資本制生産様式の形成、マニユファクチュアの發達に、したがつて歴史の「進歩」に通ずる。すなわち、生産手段の孤立的分敗的な零細私有は少數の資本家の所有に轉化せしめられ、生産の社會化がおしすすめられ、労働者階級による社會主義のための物質的・精神的諸條件がつくられる。

ところでマニユファクチュアの基本的特徴の一つは、産業資本と商業資本との密接な結合ということだ。兩者の發達は反比例するが産業資本の段階的發展という前向きの見地に立つとき、小營業の段階においては産業資本に對して商業資本が壓倒的に支配し、マニユファクチュアの段階では兩者は絡みあつており、大工業の段階においては産業資本が商業資本を自己の法則の下に屈服せしめる。いま、「大塚」史學の前には産業資本主義の「序説」・「系譜」を求明するという課題があたえられている。つまり、産業資本と商業資本との關連、産業資本がまだ手工業的技術の上に立つているがゆえに商業資本によつていんべいされている賃労働と資本との對立がばくろさねなければならぬ。しかるに「大塚」史學は、せつかく豊富な資料を狩りながら、階級闘争の見地に立つマルクスの理論を方法論として徹底

させずに、商業資本Ⅱ「問屋制家内工業」と産業資本Ⅱ「マニユファクチュア」とをきりはなし「對立」させてしまふ。そして、マルクスの「二つの道」の理論の「例外」を發見する。

四、産業資本と商業資本との反比例、マニユファクチュアの發展段階・經濟構造に於ける兩者の結合、共に資本主義を歴史的におしすすめる二つの道についてのマルクスの「古典的」理論を、右のように誤解しながら、大塚氏はきりはなした二つの道と形態をつぎのように「組合」せる。すなはち、氏はいう――

「前期的資本の産業資本への推轉は右の二形態をもつが、かゝる推轉をとげる道もまた二つの方向をもつている」(同、四一頁) 氏はここで、突然商人が事實上の産業資本家になる道(つまり、氏のいわゆる「前期的資本の産業資本への推轉」の道)と生産者が商人となる道との、つまり、マルクスが指摘している二つの道とを想起する。そして、つとける、「この推轉の二つの道において、いずれの場合にも、『問屋制家内工業』および『マニユファクチュア』のいずれの形態をも採りうる」(同、――傍點は豊田)というのだ。しからば「二つの道」「二つの形態」の問題はいづれでもよいということになり、その方法的意義は見失われてしまふ。

マニユファクチュアは一言でいえば、分業にもとづく協業である。その發生からいえば、いわゆる小營業の段階の直接的必然的結果である。そして、工業における資本主義がこの小營業の段階からマニユファクチュアの段階に發展する場合、二重の経路が可能である。一方では、若干の労働者を有する作業場が徐々にその内部に分業を採用し――家内的協業は最初の分業だ――、その結果、資本家的單純協業が資本家的マニユファクチュアに轉化する。これに對して他方の商人が事實上の産業資本家になる経路がある。マルクスのこの指摘は、レーニンより、ロシアの資料にもとずいて一層具體化された。

小營業者（農民）は絶えずその中から買占人ニ商業資本を分出する。商人は農民層の財産分化（個々人の掌中における自由な資金形成）を前提し、かつ、小商品生産の分散性・孤立性と擴大される市場との矛盾を解決するものとして出現する。商業資本は小營業を小販賣に對する大販賣の優越という純經濟的法則にもとずいて支配する。商業資本の小商品生産に對する支配の第一のもつとも單純な形態は、商人（または、大作業場の經營主）が小商品生産者の製品を買入れることである。この場合、多くは商人は地方の獨占的買占人であり、買入價格をむやみに引下げる。第二の形態は高利貸業との結合と債務者の債權者に對する人身的隷屬、第三の形態は製品にたいしていろいろな商品で支拂う第四の形態は小商品生産者が生産上必要とする商品で支拂う、この場合にはかれらへの加工原料の販賣が專問的商人によつて遂行されることもある。なおこの場合、小商品生産者は製品市場からのみでなく原料市場からも遮斷されてしまう。第五の最高の形態は原料その他を小商品生産者に前貸して賃加工させるところの「資本制家内労働」の創出である。そもそも、商業資本と産業資本との相違は、前者が同一の商品を利潤を得て販賣するために買入れるにたいし、後者は商品加工された形で販賣するために商品（原料その他・労働力）を買入れることにある。ところで、第五の形態は、小商品生産者は自宅で資本家のために働く事實上の賃労働者となる。このように商人を頂點とする「資本家的家内労働」は小營業の段階においても散在的にみられるがマニユファクチュアの段階において廣汎に採用される。

さて、かゝる最高段階に達した商業資本が、これらの小營業者をして部分労働あるいは製品別分業を行わしめるようになれば、その商人が分業をともなう大作業場をもつともつまいと、全體としての生産機構は商人を頂點とする分業にもとずく協業というわけになる。ここに、商業が事實上の産業資本家になるといふ経路がある。

ここで、「大塚」史學にたいして、われわれの主張したいことは、商業資本の「進歩」性であり、世界市場を目的とする生産という點から出發しても、また世界市場から来る生産諸条件をもつて始めるといふ點から出發しても、いずれの道をたどつても、はじめから商業を基礎とする生産諸部門が開始されるということだ。

五、「大塚」史學が商業資本ニ「問屋制家内工業」が「反動性」・「保守性」をもつと、一面的に強調するとき、引用する典據の一つは、「資本論」のつぎの有名な諸指摘である。

「資本が商人資本として獨立優勢的に發達することは、生産が資本の下に従屬せしめられないこと、換言すれば、資本が一つの外來的な、それ自身から獨立した社會的生產形態の基礎の上に發達すること、意味を等しうしている。それ故、商人資本の獨立せる發達は社會の一般的な經濟的な發達と逆比例する」（「資本論」、第三卷、下卷、二八七頁）。これを産業資本の發展といふ觀點からいへば、「商人資本の獨立した發達が資本制生産の發達程度に逆比例する」といふ法則（同、二八七頁）として集約しうる。商業は既存の使用價值を自當とする歴史的な生産諸體制にたいして分解的な影響を及ぼす。「しかし、商業が、いかなる程度まで舊來の生産様式を分解せしむるに至るか、まず舊生産様式の堅固さと内部的組織のいかんにかかわる。で、この分解過程がどういふ結果をもたらすか、換言すれば舊來の生産様式に代つてどんな新しい生産様式が出現するかということ、舊生産様式そのものの性質のいかんにかゝることだ。古代世界においては、商業の作用と商人資本の發達とはつねに、奴隷經濟に結果した。また、起點のいかんによつては、直接的生活資料の生産を自當とする一家父長的奴隷制度に轉化するといふにすぎぬこともあつた。近代世界においては、それが資本制生産様式に結果してゆく。そこで、これらの諸結果そのものは、商品資本の發達とは全く別個の諸事情によつて制約されるものだとしたことになる」（同、二九〇—二九二頁）。

「商人が直接に生産を掌握する。こののちの経路は、歴史的にけいかに推轉として作用するといへ、それ自身においては舊來の生産様式を革命するに至るものでなく、むしろこれを保存し、自己の前提條件として維持する。それゆえ、たとえば十九世紀の中葉になつてもなお、フランスの諸工業、イギリスのメリヤスおよびレース工業における製造業者は、多くはたゞの名目上の製造業者たるにすぎず、現實上は、單なる商人にすぎなかつた。かれは機械業たちをして舊來の分散な仕方での労働を繼續せしめ、事實上かれ自身のために労働しているこれらの機屋たちの上に、商人としての支配だけを行つていたにすぎなかつた」

(「資本論」第三卷、上、二九三頁)。そして、「このやり方はどこでも、現實的資本制生産方法の妨げとなる。で、資本制生産方法が發達するにしたい、それは廢滅に歸する。それは生産方法を革命することなくして、直接的生産者達の位置を單に悪化せしむるだけであり、かれらおぼ資本の下に直接に從屬せしめられている人々よりもより不良な諸條件の下に立つ單なる賃銀労働者およびプロレタリアートに轉化せしめ、舊來の生産方法の基礎に立つてかれらの剩餘労働を占有する」(同)。

以上において、マルクスはつねに産業資本の形成・發達という前向きな觀點から問題を提出している。この發展の見地に立つとき、産業資本商業資本とは「反比例」する、というのだ。つまり産業資本がまだ手工業的技術の上に立つており、野蠻な中世的諸關係によつてからまれているような未熟な發達段階においては、商業資本が産業資本II小營業にたいして「獨立優勢的に」發達している。もちろんその支配は高利貸・債權奴隸・獨占・商略・偽購・掠奪などによつて直接生産者にたいしてより破廉恥な(産業資本よりも)搾取と壓迫を加えている、だからといって商業資本そのものが、産業資本の發達のどんな段階においても、そうであるとはかぎらない。また、それが産業資本II小營業のそれ以上の發展を「阻止」する「反動性」をもつなどとはいえない。封建制の胎内において自成的に形成される産業資本の發達を「阻止」し壓迫するものは、決して流通上の「支配者」ではなくして、生産上の支配すなはち基本的な生産手段たる土地の所有者である。封建的大土地所有とその權力である。商業資本は産業資本の形成にたいして「阻止的」「反動的」であるところか、促進的であり進歩的である。それは、すでにのべたとをり論理的にも歴史的にも資本制生産の不可欠な前提條件をつくる。たゞ、それは流通上に機能する資本にすぎぬゆえに、舊い生産體制を腐朽させ破壊せしむることはできても、新しい生産様式(生産力と生産關係との統一としての)を創出することはできぬ、せいぜいそれが「資本制家内労働」を創出するとしても直接的労働者達をして「舊來の分散的な仕方での労働を

繼續せしめ」、「舊來の生産様式の基礎に立つて剩餘労働を占有」するに過ぎない。しかし、われわれはこのような商業資本の小營業者にたいする最高の支配形態は、「歴史上推轉として作用する」こと、換言すれば、それが事實上の賃労働と資本とをつくり、マニファクチュアを組織し、大工業への前段階を準備することを忘れてはならない。だから十九世紀のロシアの工業について、レーニンはつぎのようにのべたのだ――

「家内制大生産は工業の資本主義的形態である。ここには資本主義的形態のあらゆる徴表が現れている。――即ち、すでに高度の發展段階にある商品經濟、個々の個人の掌中への生産手段の集積、自分の生産手段を所有せずしたがつてまた他人に労働を給付し自己のためにでなく資本定のために働く多數の労働者にたいする收奪が現れている。營業の組織からみて、家内制大生産が純然たる資本主義であることは明白である。大機械工業に比較した場合の家内制大生産の特徴は、技術が發達していないこと、(これは主として甚だしく低廉な賃銀によつて説明される)、労働者が微少な土地經濟を維持していることである」(「人民の反とは何ぞや」邦譯、三八〇頁)。「資本制生産による労働の社會化とは、人間が一つの空間において作業すること(これはこの過程の一小部分にすぎない)とはかぎらない。それは、資本の集積にもなつて社會的労働が専門化され、與えられた各産業部門における資本家の數が減少し、特殊産業部門の數が増大することである。それは、多くの分散的な生産過程が融合して一個の社會的生產過程となることである。……今やより一層専門化された各産業部門においては、資本家の數はますます減少する。このことは生産者間の社會的關聯がますます鞏固になり、生産が集結して全一體となることを意味する」(同、三二四頁)。

さらにレーニンは社會主義のための闘争という觀點から、資本主義の進歩的な「歴史的使命」について――

「資本主義は労働を社會化すると同時に、過程そのものメカニズムによつて、「労働者階級を教育し、統一し、組織し」、闘争することを教え、労働者階級の『反抗』を組織化し『收奪者を收奪』するため、政權を奪取するため、また生産手段を「少數者收奪者」の手より全社會の手に移すべく、この生産手段を收奪するため、労働者階級を統合するのであるが(「資本論」)、マルクスはこのことの中に資本主義の進歩的・革命行爲を見出した」(同、五五二頁)。しかし、「何のために――とレーニンはナロードニキを批判しつゝ――この『使命』を工場労働者の數によつて判定するのか? もちろん、プロレタリアートの革命運動

が、工場労働者の数、労働者の集中、これらの發展程度等に依存することには議論はない、しかし、すべてこのような點は、資本主義の「統一的意義」を工場労働者の數に歸着せしめるといふことを正當化するものではない（同、五六四頁）。そして、さらに「手工業の普及と共に、各地方の農民はぞくぞくと現代の工業運動の中へまきこまれる。手工業を通じての農業地方のこの革命化は、かつてイギリス及びフランスにおいて行われたよりもはるかに大なる廣さにわたつて、ドイツの産業革命を擴大せしむるのである。このことによつて、イギリスおよびフランスとは反對にドイツにおいて革命的運動が、何故にもつぱら都市の中心地に局限されずに、國內の廣汎な廣さにわたつてかくも有力に普及したか、説明せられる。このことは、またこの運動の平靜な、強固な、抑うべからざる生長を説明する。小都市の大多數および農村地方の大部分が變革のために成熟した時に初めて首都および他の大都市における勝利ある蜂起が可能となるであらうことは、ドイツにおいては明白の理である」（エンゲルス「住宅問題」序文）というエンゲルスのことばを引きつゝ、「資本主義の統一的意義」ばかりでなく、さらに労働運動の成功が、工場労働者の數のみに依存せずに手工業者の數にも依存している——（「人民の友とは何ぞや」、五六六頁）と結んでいる。

封建制生産様式から資本制生産様式への轉化のための歴史的諸條件、とくに封建的大土地所有の根本的かつ徹底的「清掃」があたへられ、「現實的生産様式」即ち現實的産業資本の形成・發達が行われると、商人が生産を掌握するといふ経路、「問屋制家内工業」の形態は「廢滅に歸する」ことは當然である。しかし、資本家階級が封建的大地主と妥協し、その本質において封建的地主的な絶對主義國家權力が産業資本の發達を自己の利害に従屬せしめ適應せしめようとするところにおいては、チープ・レイバオおよび、労働者と微細な土地經濟との結合を前提とする「問屋制家内工業」が廣汎に残存せしめられ、そのまま大産業資本や獨占資本のための巨大な生産機構に轉化せしめられる。いずれにしても、この道は賃労働をつくり、大工業への道を準備する點で「歴史上に推轉として作用する」のである。

六、産業資本および商業資本の内面的聯關にたいする「大塚」史學の右のような誤り、この狹義の經濟學上の誤謬は、さらに廣義の經濟學上の、従つて歴史の運動法則そのものについて精神主義を生んでいる。流通即前期的資本の運動を生産即産業資本の運動からきりはなしてとりあつかひ、流通の中に運動の法則——それが「阻止」的であれ「保守的」であれ——があるかのようになっている。「大塚」史學は、産業資本の自己運動を産業資本と商業資本との交互作用としてしまふ。氏は産業資本即資本制生産の中に眼を向け、資本主義の自己運動の原動力をその中に内在する基本的矛盾・敵對的對立に求めることが出来ない。逆に、氏は運動の原動力をそれにとつて外部的な「第三者」對立物の統一者に求める。

いつたい、氏は個別的産業資本家にとらわれているがゆえに、資本主義的生產關係を個々の資本家の目的である「營利」に現象化すると共に、資本主義的生產力をその目的を實現するための手段としての技術・經營に一面化してしまふ。氏は、このようにきりはなしてしまつた「生產關係」じつは「營利」と「生産力」じつは「マニファクチュア技術とを結合するために、「第三者」にたよらざるをえない。そして、「大塚」史學が一般的に個別的資本家の見地にとらはれているのみでなく、特殊的には小商品生産者ないし「マニファクチュア資本家、すなはち氏のいわゆる「中産的生産者層」の（不安な）動搖的地位を反映しているかぎり、市場との關係において絶えず分解しつつある小商品生産者の地位を、全商品經濟體制の見地から考察することができず、個々の商業資本の獨占的支配を非難し呪詛しつつけると共に、永遠の「精神」にての魂の救済を求めざるを得ない。

このような發展し流動して止まぬ資本主義社會にたいする個別的現象の見地と、これを安定し固定化しようとする小ブルジョアの見地とは、「營利」と「技術」とを「精神」・「倫理」を媒介とする「主體」という個人的現象のうち統一せしめるのである。現象的なものを本質的なものに還元し、逆に抽象的なものから具體的なものを再構成すると

いうプロセスと、現象的なものをそのまゝ美型化し（近代的人間類型）固定化し、たゞ現象を詳細に記述し物語るというプロセスとは異つてゐる。「大塚」史學が、「中産的生産者層」という、あらかじめ資本制生産の本質を理解し目的と手段とをあらかじめ統制的意志のもとに統一してゐるような、「理想的」な「人間類型」をつくり出し、それが資本制生産を「推進する」というふうに、資本主義社會の發展を敘述するとき、讀者は具體的なものと現象的なものと混同し、このような「大塚」史學の敘述が何か唯物史觀よりもヨリ具體的であるというような錯覺におちいつてしまふ。

労働者階級の觀點よりすれば、資本の歴史的發生とは、「直接的生産者（奴隸および農奴——豊田）からの收奪を、換言すれば、生産者自身の労働に立脚した私有の解體を意味する」（『資本論』第一卷、下、七五五頁）、「この收奪は一連の暴力的方法を包含するものであつて、その中の劃時代的なものだけを、われわれは資本の原始的蓄積の方法として考察したのである。直接的生産者からの（生産手段および生活資料の——豊田）收奪は、無慈悲きわまる兇暴をもつて、もつとも恥すべき、もつとも醜惡な、もつとも卑劣にして忌むべき慾念の衝動の下に遂行された。己れ自身の努力によつてえたところの、いわば個々獨立した労働團體とかれの労働條件との融合に立脚するところの私有は、他人の形式的に自由な労働の搾取に立脚するところの資本制的、私有によつて驅逐される」（同、七五五——六頁）。かくてマルクスはのべた、「資本制生産方法の『永遠の自然律』を展用せしめて、労働者と労働條件との分離過程を完成し、一方の極においては社會的の生産手段および生活資料を資本に轉化せしめ、他方の極においては民衆を賃労働（近世史の人為的産物たる自由な『労働貧民』——イギリス法律にあらわれたことは——豊田）に轉化せしめるためには、この種の思いきつた努力を要したのである。貨幣がもしカージュのいうごとく『一方の頬に生來の血痕をおびてこの世に來

つた』ものであるとすれば、資本は頭の天邊から足の爪尖にいたるすべての万孔から血と汚物を滴らしつつこの世に來たつたといえる」（同、七五四頁）。

これに反して、「大塚」史學においては、資本は工業と農業との、生産者と生産條件との「幸福」な結合としてかすかすの「徳性」のない手として讚美されつつ、プロテスタンティズムのバラ色の祝福と共に生誕する。

——一九四七・八・二〇——